

地域情報（県別）

【大阪】ダビンチ術者11人で、ロボット支援手術年間200症例以上を目指す-福田隆・南大阪病院院長に聞く◆Vol.2

消化器領域の内視鏡検査が毎年1万件を超える

2026年5月6日（水）配信 m3.com地域版

住之江区および西成区の基幹病院として主に急性期医療を担っている南大阪病院（大阪市住之江区）は、大阪府がん診療拠点病院に指定されている。がん医療の特色になっている消化器領域での内視鏡診療、2024年1月から開始したロボット支援手術の実施状況などについて、院長の福田隆氏に聞いた。（2026年3月13日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら

2024年の消化器領域内視鏡検査総件数は1万870件

——大阪府がん診療拠点病院に指定されていますが、がん診療の特徴を教えてください。

当院は、5大がん（胃がん、大腸がん、肺がん、肝がん、乳がん）や食道がんなどの診療実績が評価され、2010年に大阪府がん診療拠点病院に指定されました。がん診療では、診断、手術と化学療法による治療、リハビリテーション、緩和ケアに取り組み、相談支援なども積極的に行っています。2024年の年間新入院がん患者数は、胃がん159人、大腸がん204人、肺がん140人、肝臓がん10人、乳がん99人、年間のがん登録件数は900件を超えています。

がん診断においては、内視鏡センターで実施している消化器内視鏡検査総件数が2024年は1万870件に上り、2021年以降毎年1万件を超えるハイボリュームセンターになっています。最新の内視鏡機器を備え、圧倒的な症例数に裏付けされた確かな診断能力を誇ります。

手術においては、2023年9月に手術支援ロボット「ダビンチXi」を導入し、2024年1月からロボット支援手術を開始、2025年4月にはロボット手術センターを新設しました。

大阪市のがん検診率は全国平均よりも低い水準にありますが、その大阪市の中でも住之江区と西成区は市の平均水準よりも低くなっています。そのため、当院では、がんの予防やがん検診の啓発に積極的に取り組み、早期にがんを見つけ、早期治療を行うことを目指しています。



福田隆氏

——病院の特色になっている内視鏡センターでは、どのような診療に取り組んでいますか。

内視鏡センターは、医師と看護師、臨床工学技士が協働しながらチーム医療を行っています。医師は常勤の消化器内科医8人と呼吸器内科医1人、大阪公立大学病院からの非常勤医が5人です。看護師は9人で、うち内視鏡技師資格者が5人います。臨床工学技士は4人で、うち内視鏡技師資格者が2人です。

内視鏡治療の主なものとしては、大腸ポリープに対する内視鏡的切除術（ポリペクトミー）、内視鏡的逆行性胆管膵管造影検査（ERCP）に関連した治療、早期消化管がんを内視鏡により切除する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）、ステント留置術などを行っています。

当院の外科では食道がんをはじめ胃と大腸がんの手術を数多く行っていますが、食道・胃・大腸の表在がんと早期がんに対しては、内視鏡センターにてESDを積極的に行っています。特に食道に対するESDは、高度な内視鏡技術が必要となるため取り組んでいる施設は限られていますが、当院ではより安全で確実な治療を目指して、手術室で麻酔科医の協力の元に全身麻酔下で行っています。2024年の診療実績は、食道ESD 18件、胃ESD 71件、大腸ESD 32件、合計121件でした。

ダビンチ術者は泌尿器科4人、消化器外科7人

——ロボット支援手術の実施状況とロボット手術センターの活動内容を教えてください。

ロボット支援手術は、2024年1月より泌尿器科で前立腺がん、2月には消化器外科で大腸がんと胃がんに対して導入し、2025年7月からは腎腫瘍に対しての手術でも行うようになりました。

これまでの診療実績は、2024年大腸がん54例、胃がん7例、前立腺がん27例、合計88例、2025年は大腸がん68例、胃がん20例、前立腺がん・腎がん30例、合計118例でした。ダビンチ術者は、泌尿器科4人、消化器外科7人で、ロボット手術センター長の竹村雅至医師は日本内視鏡外科学会ロボット支援手術プロクター〔消化器・一般外科（大腸）〕を取得しています。

ロボット手術センターでは、消化器外科、泌尿器科、麻酔科、看護師、臨床工学技士などの連携を強化し、ロボット支援手術の円滑な導入を図っています。主な活動内容は、ロボット支援手術の標準化と安全性の担保、効率的な運用と新規術式の安全な導入、手術の評価と監査、新規ロボット術者の育成とロボット支援手術に関する広報です。



ロボット支援手術の様子

ロボット支援手術は年間200症例以上を目指す

——ロボット支援手術の今後の運用については、どのように考えていますか。

現状では、多くのロボット支援手術が通常の腹腔鏡手術と診療報酬が同等であり、導入費用やランニングコストが高いロボット支援手術は、病院収支的には厳しい面があります。しかし、2026年度の診療報酬改定において、直腸切除・切断術でもロボット支援手術で行った場合の評価が新設され、現行の腹腔鏡手術より3500点上乗せされることになっています。さらに、ロボット支援手術の年間実施症例数が200症例以上など一定の条件を満たす医療機関では、特定の術式をロボット支援手術で行う場合、手術料に1万5000点を加算できる内視鏡手術用支援機器加算が新設されます。

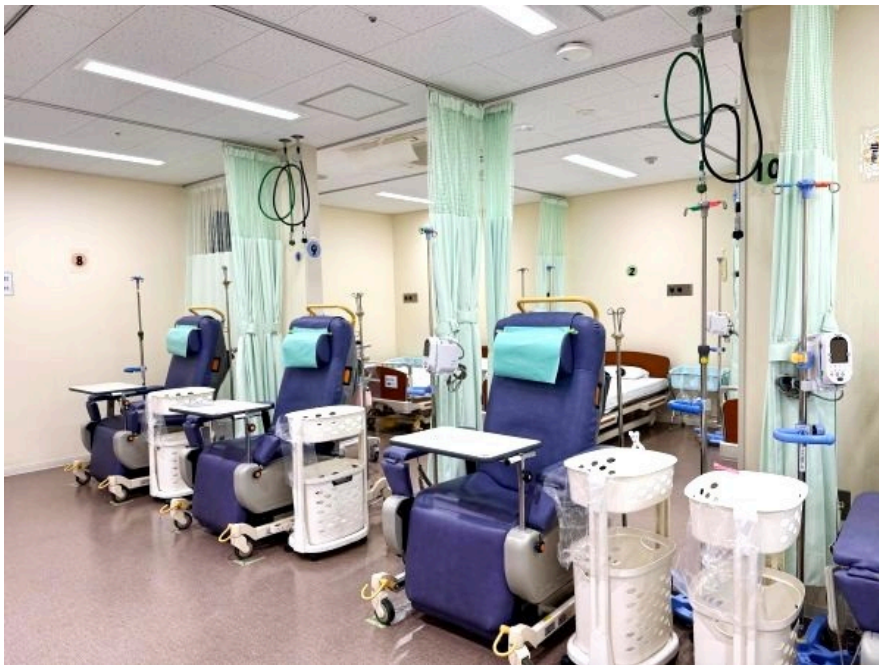
これは、症例数の多い病院にロボット支援手術を集中させることにより、治療成績の向上とコスト効率を高めることを意図しており、当院もロボット支援手術を今後も推進するためには、年間200症例以上を目指す必要があります。

ダヴィンチ1台で年間200症例以上のロボット支援手術を行うためには、1日に2例行える体制を整えることが必要になります。そのためには、ロボット手術センターにおいて、医師とコメディカルの習熟度をさらに向上させると共に、専門チームとして多職種の協力と工夫が重要になると考えています。

また、外科医、特に消化器外科医の不足が顕在化する将来において、急性期病院として外科手術を継続していくためには手術支援ロボットが必須であり、外科医のリクルーティングの面からも必要不可欠だと思っています。

——化学療法の特徴も聞かせてください。

化学療法は、消化器外科、呼吸器内科、泌尿器科、乳腺外科において、主に外来での治療に取り組んでいます。外来治療室にはベッド6床とリクライニングシートが5床あり、テレビを設置するなどして、患者さんがリラックスして治療を受けることができるようにしています。



外来治療室

化学療法は、医師・薬剤師・看護師などで構成した化学療法委員会で承認されたレジメンが、対象がん種と使用薬剤ごとに事前に電子カルテに登録されています。その中から、最も適切なものを医師が患者さんと相談しながら選択しています。治療当日は、医師が採血検査結果や体調を確認した上で治療の実施を決定し、選択されたレジメンでオーダーされた薬剤と用量を薬剤師が確認して実施しています。2024年の化学療法延べ患者数は1337人でした。

がん薬物療法看護認定看護師やがん看護専門看護師、がん薬物療法専門薬剤師などの専門スタッフが、患者さんに寄り添い、化学療法への不安や副作用の心配などについての相談にも応じています。

◆福田 隆（ふくだ・たかし）氏

1982年大阪市立大学（現：大阪公立大学）医学部卒業、医学部第3内科（現：消化器内科）入局、1988年同大学大学院医学研究科第3内科学博士課程修了、1989年同大学第3内科助手。1990～1991年米国カリフォルニア大学アーバイン校留学。1998年城東中央病院副院長、2006年同病院院長。2012年南大阪病院副院長、2020年同病院院長。日本消化器病学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医、日本消化管学会専門医・指導医、日本内科学会指導医、日本栄養治療学会認定医、日本抗加齢医学会専門医、日本医師会認定産業医。

【取材・文＝竹花繁徳】（写真は病院提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

